# 四 言葉を見つめる I

さまざまな視点から言葉について論じよう

読むこと

記号を使う動物　池上嘉彦
記号としての言語について理解する

言葉がつくる女と男　中村桃子
言葉とアイデンティティの関係について考える

学びを広げる

言葉の力について考える　千葉雅也
読み比べをとおして「創造性」という観点から、言葉の力について論じよう

［コラム］ツイッター哲学

**新・環境倫理学のすすめ 増補新版**
加藤尚武

『環境倫理学のすすめ』の続編。温暖化、持続可能性、石油資源、貧困、生態系などの課題から、環境倫理学を具体的に解説。

**自然再生**
鷲谷いづみ

「征服型戦略」の破綻の結果として限界を超えた地球生態系。著者は、あらゆる知恵と知識を動員し、「積極的共生型戦略」に未来を託すことを提唱する。

**人新世の「資本論」**
斎藤幸平

経済活動が地球を破壊する「人新世」。それを防ぐためには資本主義の際限なき利潤追求を止めなければならない。だが、資本主義を捨てた文明に繁栄はありうるのか。

**経済学は温暖化を解決できるか**
山本隆三

地球温暖化は「経済的手法」で解決できるのか。温暖化問題の歴史や日本を含む各国の政策をふまえ、「経済的手法」を分析する。

**石油の「埋蔵量」は誰が決めるのか？**
岩瀬昇

地球温暖化とも密接に関わるエネルギー問題。中でも重視される石油と天然ガスに関わる世界の現状を、複眼的な視点から解説する。

**沈黙の春**
レイチェル カーソン／青樹築一 訳

自然を破壊し人体をむしばむ化学薬品の浸透、循環、蓄積を追究し、何をなすべきかを訴える。一九六二年、化学物質による深刻な環境汚染への警告を、最初に発した一冊。

## 単元の振り返り

- 「環境倫理」という考えを理解できたか
- 人類の環境への影響について考えを深められたか
- 「企業の社会的責任（CSR）」について調べ、考えたことを発表できたか
- さらなる学びへの意欲や関心をもてたか

# 記号を使う動物

池上嘉彦（いけがみ よしひこ）

「なぜ詩を作るのか」という問いに対して、ある詩人は「日常の言葉の記号性を打破するために」と答えている。日常の言葉では、語形と語義の間に、慣習によって定められた結びつきができあがってしまっている。日常の言葉を使っている限り、我々はすでに多く惰性化した日常の言葉のきまりの上に成り立つ日常の世界の中で、これまた惰性化した営みを繰り返すだけである。詩人の意図しているのは、この惰性に揺さぶりをかけるということである。既成の語形と語義の間の結びつきをずらしてみる。例えば、「焔（ほのお）のつらら」のような比喩はその一つの場合であるが、その意味で詩作は、新しい「記号」を生み出す営みである。そして、その新鮮な言葉遣いの創り出す意味を、日常の世界を超えるための踏み台とするわけである。

新しい言葉遣いも、ある表現があることを意味している（あるいは、意味しているように解せる）という限りは、やはり「記号」であることには変わりない。しかし、それは、すでに定まった内容を慣習に従って何かが表しているというような「符号」[1]ではない。むしろ、新しい「記号」が生み出され、その「記号」によって捉えられた新しい内容が我々の世界に新たな知見として加えられる。それは一つの創造的な営み――神学的な意味とは別の意味での「言語創造」の営みである。

「言語創造」というと何か大変崇高なことに聞こえるが、実はこのような「言語創造」は、人間であれば誰しもが絶えず行っていることである。朝の小鳥のさえずりに楽しい一日の予告を読み取ったり、一枚の葉の落ちていく様子に天下の秋を知ったりする時、そこでは「記号」が作り出されている。人間は、すでに慣習的に定められた「記号」をあやつるばかりでなく、新しい「記号」をせっせと創り出しているのである。

このように考える場合、いちばん基本になることは人間の「意味づけ」とでもいった行為――つまり、あるものにある意味を付したり、あるものからある意味を読み取ったりする行為――である。人間が「意味あり」と認めるもの、それは全て「記号」になるわけであり、そこには「符号」と呼ばれるものを特徴づけているような固定性はない。むしろ、「記号現象」が生じていると言ってもよいくらいである。人間はこのような「言語創造」にも似た行為を、絶えず、しかもその文化のあらゆる面で行っている。その原型と本質を探っ

参照
現代社会を読み解くために3→404ページ
現代社会を読み解くために7→412ページ
現代社会を読み解くために8→414ページ

問1 「符号」と「記号」の違いは何か。

本語句
知見

てみること――そこに記号論は関心を向けるのである。人間の「意味づけ」する営みの仕組みと意義――その営みが人間の文化をいかに生み出し、維持し、そして組みかえていくか――このようなテーマは近年の哲学や言語学の大きな関心事となっているのである。

ところで、人間の「意味づけ」の営み――それは日常生活のレベルでは、何よりもまず「言葉」の使用によって支えられている。もしそのようには考え難いというのであるならば、それはすでに慣習として固定化したレベルで言葉を捉えているからである。遡って、言葉が生まれる時点を考えてみるとよい。いちばん身近で単純な例は、日常生活における「命名」という行為である。

例えば自分が飼っている犬に「ポチ」という名前をつけるとする。なぜ名前をつけるか――もちろん他の犬と区別するためである。では、どうして区別するのか――それはその犬が自分にとって他の犬とは違った特別の価値をもっているという認識があるからである。（人間に対する命名を考えてみれば、この点はもっと明らかであろう。人間には誰しも名前が与えられるが、犬はそうではない――これはもちろん大変理由のあることなのである。）特別の名前が与えられることによって、そのものが他でもって代えることのできないものであるという意味づけが完了し、自分との関連が確認されるわけである。



名前が与えられ、確認される対象は、例えば自分の親しい人とか、大切に飼っている犬とか、その正体も素性もよくわかっているものに限られる必要はない。例えば、あるグループの人たちが自分たちの行動・運命が何か自分たち以外のものによって支配されていると思い、そのようなものに「ブーボー」と名前をつけたとしよう。（このような場合、名前をつけることをはばかって単に「印」――例えば⊕――でもって代えることもあろうし、あるいは名前はあるのだがそれを言うのは[1]タブーになっているということもあろう。しかし、いずれにせよ、それを表す「記号」ができたわけである。）そして人々は自分たちが「ブーボー」という名前をつけた対象にはたらきかけて（例えば、祈りや供え物を捧げることによって）、自分たちの行動や運命に対する支配が好ましいものになるよう試みるであろう。しかし、「ブーボー」そのものの正体はその間、結局はよくわからないままかもしれない。

ただ、名前を与えることによって人々は一つの存在を想定し、自分との関連でそれを位置づけてみようとしていることだけは確かである。「ブーボー」という記号は、未知のものを捉え、自分との関連で意味づけし、自分たちの世界に取り込もうとする人間の試みの産物である。少し考えてみれば、未知のものを意味づけるという記号のはたらきは、このような「宗教的シンボル」とか、捉え難い芸術的理想を象徴するといったような場合から、未知の素粒子や惑星を想定して理論的に論じてみるというような自然科学の先端的な分野

1 タブー　taboo（英語）
信仰や社会習慣の上で禁じられた行為。また言葉に出したり、行ったりしてはいけないこと。

に至るまで、人間の文化的な営みに広く関わっていることがわかるはずである。

言葉（あるいは、一般に記号）による意味づけという営みを通じて、人間は自らにとって未知のもの、関わりのなかったものを自らとの関連で捉え、自らの文化の世界の中に組み込み、自らの世界を膨らませ続ける。

人間の記号による営みには、このように「創造的」と呼んでよい一面があると同時に、実はもう一つの重要な面があるということにも注意しておかなくてはならない。

再び、言葉を例にして考えてみよう。幼児が言葉を習得する過程というのは、何も知らなかった自分のまわりの世界を整理し、秩序づけていく過程でもある。例えば、「ママ」という言葉が「マンマ」と分化するとき、母親は〈自分に食べ物を与えてくれる（そして、その他にも自分にいろいろなことをしてくれる）人〉として、〈食べる物〉とは、区別されるべき対象であるという把握ができあがる。外国語の習得される場合も同じである。英語の話し手が日本語を学べば、同じ〈兄弟〉（brother）であっても、年上の者（「アニ」）と年下の者（「オトウト」）が言語習慣的に異なるものとして意味づけられていることを知る。

幼児も外国人も、このようにして自らの世界をだんだんと膨らませていく。そして、このような過程を通じて一つの言語の習得が完了した段階では、習得者は一つの意味づけの体系を身につけたことになる。ただ、この場合、幼児も外国人も完全に自由に、自己の主体的な捉え方において新しい世界を創り出す立場にはおかれていない。彼らの身につけるのは、習得する言葉のきまり（「コード」）によって支えられた既存の世界の秩序である。

「ママ」という言葉を自分の母親と同年輩ぐらいの女性に区別なく適用する幼児は、周囲の人たちから注意されてそのような捉え方の許されないことを知る。日本語を身につけようとする外国人にとっては、「アニ」と「オトウト」を区別することを拒む自由はない。一つの言語を習得することは、一つの特定の捉え方――一つの「イデオロギー」[2]――を身につけることでもあるのである。

ひとたび身につけた意味づけの体系――それが慣習として確立すると、それは逆にそれを身につけた人を捕らえて放さない「牢獄」[❷]にもなる。それを捉えた人間を、今度はそれがとりこにするのである。捕らえられた人間は、その意味づけの体系のきまりに従って、ものを捉え、行動する。人間は機械のように動き、全てが「自動化」する。何かが起こっているようで、実は何も起こっていない――そういう世界が生じてくる。

しかし、機械とは違って、人間は――一方では秩序を導入しなければ気がすまない存在であると同じように――完全に秩序づけられた閉じた世界に長くは安住していられない存

2 イデオロギー Ideologie（ドイツ語）人間の行動を規定する、歴史的・社会的立場に基づいて作られた根本的なものの考え方の体系。

問❷ なぜ「牢獄」なのか。

在でもある。遅かれ早かれ、創造への営みに人間はかりたてられる。そして、既成の秩序を部分的になり、全面的になり、組みかえることを試みるようになる。すでに見たとおり、詩人は何よりもこの言葉の牢獄に挑む人たちである。そこでは日常の言葉を超える言語創造を通じて、新しい価値の世界が開かれるわけである。言語習得の場合と比べると、もう一段階高い次元での意味づけの営みがなされるのである。

人間は、自分のまわりの事物に対して意味づけをしないではいられない存在である。しかもその際の意味づけは、全て人間である自らとの関連で行われる。自然的な対象であっても、それが人間との関連でどのような価値を有しているかという視点から捉え直され、人間の世界のものとして組み入れられる。その世界は、すぐれた意味での文化の世界である。そして、そのような世界の創造、維持、それから時間的・空間的いずれもの意味における伝達――こういった全ての文化的な営みに、人間が記号をあやつるという営みが深く関わっている。人間は確かに「記号を使う動物」なのである。

（出典『記号論への招待』一九八四年）

**池上嘉彦**　一九三四（昭和九）年～。言語学者。京都府の生まれ。記号論、意味論、詩学を専門としている。著書に『ことばの詩学』『〈英文法〉を考える』『英語の感覚・日本語の感覚』、訳書にU・エーコ『記号論1・2』などがある。

## 課題A

一　「既成の語形と語義の間の結びつきをずらしてみる。」（90・6）とあるが、どういうことか。「焔のつらら」という比喩を使って説明してみよう。

二　本文にある「ブーボー」と「マンマ」の例をもとに、「人間の記号による営み」（94・6）にはどのような面があるか説明してみよう。

三　「一つの言語を習得することは、一つの特定の捉え方――一つの『イデオロギー』――を身につけることでもある」（95・8）とあるが、どういうことか。日本語と英語（その他自身が身につけている言語や方言）の例をあげて説明してみよう。

四　「人間は確かに『記号を使う動物』なのである。」（96・12）とあるが、どういうことか。文章全体をとおして説明してみよう。

## 課題B

一　身近にある「言語創造」（91・5）の例を、詩、小説、歌詞などから探して発表してみよう。

## 語句

一　次の漢字を使った熟語を調べてみよう。

既・慨・概

## 漢字

惰性90　既成90　崇高91　捧げる93　膨らむ94

把握94

# 言葉がつくる女と男

中村桃子（なかむらももこ）

私たちがコミュニケーションを行うときには、同じ内容を伝えていても、言葉遣いを使い分ける。それは、話している内容以外のさまざまな情報を「言葉」を使い分けることによって伝えているからである。その中には、自分をどのような人物として造形するのか、相手をどのような人物として扱っているのか、あるいは、会話の中に登場してくる人をどのような人物として言及しているのか、という情報も含まれている。会話に関わるさまざまな人物を「言葉」を使い分けることによって造形しているのである。言語行為はアイデンティティをつくるといわれるゆえんである。

日本語では、[1]このようなはたらきは、おもに人称詞[2]や文末詞[3]が担うことが多い。自分のことを「僕」と呼ぶか「私」と呼ぶかで、話し手が表現している自分のイメージはずいぶん違ってくる。相手のことを「〜さん」と呼ぶか「〜先生」と呼ぶかで、自分と相手の関係も異なる。また、会話に登場した人を「あの人」と呼ぶか、「あいつ」と呼ぶかでも、その人物の造形が変わってくる。

これまで、言葉とアイデンティティの関係は、あらかじめ話し手が自分はどのような人物なのかというイメージをもっていて、そのイメージに基づいて、特定の話し方を選択するものだと理解されていた。謙虚な人は丁寧な言葉遣いを選択し、傲慢な人は横柄な言葉遣いを選択する。ある人が丁寧な言葉遣いをするのは、その人が謙虚な人だからだと考えられた。

「女言葉」の場合も同様に、女性が「女言葉」を使うのはその人が「女だから」と考えられた。このように、アイデンティティをその人にあらかじめ備わっている属性のように捉えて、人はそれぞれの属性に基づいて言語行為を行うという考え方を「本質主義」と呼ぶ。たとえば、アイデンティティの内でジェンダー[4]に関わる側面を本質主義に基づいて表現すると、人は〈女／男〉というジェンダーを「もっている」、あるいは〈女／男〉というジェンダーに「属している」と理解される。

しかし、このような考え方では説明のつかないことがたくさん出てきてしまった。もっとも大きな問題は、女性も男性もそれぞれの状況に応じてさまざまに異なる言葉遣いをしているというあたりまえのことがはっきりしてきた点である。実際の場面で女性たちが用

●参照
現代社会を読み解くために3→404ページ
現代社会を読み解くために7→412ページ

1 アイデンティティ　identity（英語）自分がどのような存在であるかという認識。自己同一性。

問❶「このようなはたらき」とは、どのようなはたらきを指すか。

2 人称詞　「話し手（一人称）」「聞き手（二人称）」「それ以外（三人称）」を言い表す語。

3 文末詞　「ぞ」（例「行くぞ」）、「わよ」（例「行くわよ」）など、文の末尾について、聞き手へのはたらきかけや話し手の気持ちをあらわす表現。

4 ジェンダー　gender（英語）生物学的な性差でなく、社会的、文化的につくられた「女らしさ」「男らしさ」として捉えられる性別の概念。

＊語句
属性

いている言葉遣いは、さまざまな要因によって多様に変化している。また、同じ男性でも、家庭での言葉遣いと職場での言葉遣いは異なる。同じ職場でも、話す相手や、場所、目的によって異なる。さらにいえば、同じ男性でも子供の時と大人になってからでは言葉遣いが変わる。同じ〈男〉という属性をもっていたとしても、その言葉遣いはそれぞれに異なる。それだけではない。男性も「女言葉」を使う場合があるし、女性も「男言葉」を使う場合のあることが明らかになった。多様に変化する女性の言語行為から、自然に「女言葉」という一つの言葉遣いが形成されたとは考えられない。

そこで提案されたのが、アイデンティティを言語行為の原因ではなく結果と捉える考え方である。私たちは、あらかじめ備わっている〈日本人・男・中年〉という属性に基づいて言語行為を行うのではなく、言語行為によって自分のアイデンティティをつくりあげている。「私は日本人だ。」「男として恥ずかしい。」「もう中年だなあ。」などと言う行為が、その人をその時〈日本人〉〈男〉〈中年〉として表現すると考えるのである。ジェンダーでいえば、〈女／男〉というジェンダーを、その人がもっている属性とみなすのではなく、言語行為によってつくりあげるアイデンティティ、つまり、「ジェンダーする」[2]行為の結果だとみなすのである。そして、私たちは、繰り返し習慣的に特定のアイデンティティを表現し続けることで、そのアイデンティティが自分の「核」であるかのような幻想をもつ。哲学者[5]ジュディス・バトラーは、「ジェンダーとは、身体を繰り返し様式化[*]していくことであり、きわめて厳密な規則的枠組みの中で繰り返される一連の行為であって、その行為は、長い年月の間に凝固して、実態とか自然な存在という見せかけを生み出していく。」と指摘している（『ジェンダー・トラブル』）。このように、アイデンティティを、言語行為をとおして私たちがつくり続けるものだとみなす考え方を「構築主義」と呼ぶ。

それでは、私たちは、どのようにしてアイデンティティを表現するのか。何もないところから表現することはできない。材料が必要である。実は「女言葉」や「男言葉」は、この材料の一つなのだ。私たちが言語行為の中で、自分や聞き手のアイデンティティをつくりあげるときに利用する言語資源なのである。

私たちは、子供の頃から「女言葉」や「男言葉」を話す人物が登場する小説、テレビドラマ、映画、広告、マンガ、アニメに接することで、何が「女／男言葉」であるのかという知識を獲得している。「女／男言葉」だけではない。これらのメディアには、さまざまに異なる年齢、職業、出身地域、階級によって区別された集団のカテゴリーと結びついた言葉遣いの情報があふれている。これら特定の言葉遣いと特定の集団の結びつきは、指標

問❷ 「『ジェンダーする』行為」とはどのようなことか。

5 ジュディス・バトラー Judith Butler 一九五六年〜。アメリカの哲学者。著書に『ジェンダー・トラブル』（一九九〇年）などがある。

＊語句 様式化

性と呼ばれる。私たちは、言語行為において、これらの指標性に関する知識を使って、アイデンティティをつくりあげるのである。

もちろん、私たちがアイデンティティを表現するときに利用する資源は言語に限らない。服装や髪型、しぐさや行動なども重要な資源である。しかし、これらの資源が利用できるのも、言語と同じように、すでに意味と結びついているからである。「セーラー服」を、その人が〈女子高生〉であることを示すために利用できるのは、すでに「セーラー服」と〈女子高生〉のアイデンティティが結びついているからである。この意味では、服装や髪型も広い意味での「言葉」と類似したはたらきをしていると考えられる。

構築主義によれば、言語行為は、あらかじめ人がもっているアイデンティティを表現しているのではなく、人がさまざまなアイデンティティをつくりあげる過程である。女子高生でなくてもセーラー服を着て〈女子高生〉を「演じる」ことができるように、「女言葉」を使う人は女に限らない。構築主義の立場から考えることで、女も「男言葉」を使うことが説明できるようになるのである。

ここまで読んできて、賢明な読者は、なぜ服装や言葉がアイデンティティと結びつくのか推測できるだろう。悲しいかな人間は、「アイデンティティ」のような抽象的イメージを直接伝えあうことができない。五感で認識できるものをとおして表現しなければならないのである。その中でも「言葉」は、もっとも体系化され誰でもが利用することのできる資源である。服は持っている人しか利用することができない。まさに人間が、音声や文字という具体物をとおして意味を表現する「言語」を発達させてきたゆえんである。

（出典『〈性〉と日本語 ことばがつくる女と男』二〇〇七年）

問❸「服装や髪型、しぐさや行動なども重要な資源である。」のはなぜか。

※語句
ゆえん

**中村桃子**　一九五五（昭和三〇）年〜。言語学者。東京都の生まれ。多彩なメディアの言葉遣いから、言語とジェンダーの関係、言語行為によるアイデンティティの構築について研究している。著書に『ことばとジェンダー』『「女ことば」はつくられる』などがある。

## 課題A

一　「言葉とアイデンティティの関係」（99・3）において、次の考え方をそれぞれ説明してみよう。
①本質主義（99・10）　②構築主義（101・6）

二　「実は『女言葉』や『男言葉』は、……言語資源なのである。」（101・9）とあるが、筆者がこのように述べているのはなぜか、説明してみよう。

三　「服装や言葉がアイデンティティと結びつく」（102・14）と筆者が述べているのはなぜか、まとめてみよう。

## 課題B

一　漫画、アニメ、小説、記事、ドラマ、映画などから、「集団のカテゴリーと結びついた言葉遣いの情報」（101・15）の例をあげて、話し合ってみよう。

## 語句

一　次の語句の意味を調べてみよう。
造形・造詣

## 漢字

謙虚 99　傲慢 99　横柄 99　凝固 101　賢明 102

## 学びを広げる

**言葉の力について考える**

「記号を使う動物」と「言葉がつくる女と男」を読み比べて、それぞれの文章が「言葉の創造的な側面」をどのように論じているか、五百字程度でまとめてみよう。



## コラム

コラムを参考に、自分でタイトルを付けてつぶやいてみよう。

### 千葉雅也（ちばまさや）『ツイッター哲学』（2020年）

1978（昭和53）年〜。栃木県の生まれ。哲学者。

千葉雅也『ツイッター哲学』
**大人になった証拠**
高校時代まで消せる筆記具でキレイにノートをとっていて、大学に入ってもちょっとそれをしていて、そのうちボールペンになり、書き損じても消し線を付けたり潰したりするので平気になったら、大人になった証拠である。
2013年8月6日

千葉雅也『ツイッター哲学』
**その「感じ」**
仕事がうまく進まない、そう感じたときは、行き詰まった、と思うのではなく、行き詰まりを「感じている」と思うべきだ。問題は、まずもってその「感じ」からの回復である。
2012年1月18日

千葉雅也『ツイッター哲学』
**他者が必要**
ピアノの練習にしても、手癖から逃れるには、やったことのない動きを外から強制される必要がある。言い換えればそれは、他者が必要だということ。先生でなくても、教本の類でも、ある程度は他者として機能する。他者が新たな枠組みを提示し、それに対して身体が変性し、拡張される。
2018年2月22日

千葉雅也『ツイッター哲学』
**惰性**
創造的になるために、惰性に逆らって「つねに意識を高く持とう」としても三日坊主になる。重要なのは、惰性的にやってしまう日々のルーチンのなかに、なんとなく勉強してしまえるタイミングとかをうまく組み込むこと。「惰性的に創造力を高めるための環境設定」をする。
2013年1月28日

千葉雅也『ツイッター哲学』
**匿名者**
中古のテーブルはいい。新品の天板だと、使い始めの頃は、そこに付く痕跡が「自分の痕跡」だと意識して、気になる。知らない経歴をたどってきたテーブルはスクランブル交差点みたいな感じがして、そこに向かうと自分は匿名者になる。カフェのテーブルがそう。それでなんだかとても気が楽になる。
2013年1月30日

千葉雅也『ツイッター哲学』
**たんに他者である**
他者がたんに他者であるだけで、その言うことが私に、私が自分で内的に思うよりも強い規定力をもつというのは、「神」概念に関わっているということがわかった。思弁だけど。ここで、他者とは物体でもよい。なぜ紙に書き出すと考えが進むのか、それは、「紙が神だから、いや、神が紙だから」である。
2017年1月16日

千葉雅也『ツイッター哲学』
**語り合える人**
ひたすら無意味だけど、なんか気持ちいいもの、というのに反応し、そのことを言葉にし、語り合える人というのは、案外少ないものだ。しかし僕の生は、そこに基盤がある。意味があること、何かに貢献することに、僕の生の基盤はない。
2016年7月23日